

2022年11月6日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「小羊に導かれて」

聖書：イザヤ書40：1～11

イザヤ書40章は、ユダ国がバビロニア帝国に敗れ、民の多くが強制連行され、バビロン捕囚の民となったことが記されている。もうすでに50年が経とうとしていた。その置かれた現状には、当たり前のように不条理な差別があり、人間扱いされない実情がそこにはあった。預言者イザヤは、その現状に向き合い神の慰めと希望を語るのである。《慰めよ、わたしの民を慰めよと／あなたたちの神は言われる》と。

《肉なる者は皆、草に等しい・・・この民は》とは、ユダの民、イスラエルの民のことを言っている。おごり高ぶる国は、結局は、草や花のように枯れてしまうものに過ぎない。そしてこの異国の地バビロンもまたいずれ滅び行くものだと預言している。ゆえに、その現状に嘆くなという励ましの言葉である。そしてあなた方は、今も後もとこしえに変わることのない神の言葉にすがっているか、信頼を置いているか、耳を傾けているかと問いかけている。《神の言葉はとこしえに立つ》ということあなた方は現実の事として捉えなければならないというメッセージがここにある。

神の言葉に向き合うということは、この世において、あの世の業、天の業、神の業が、この世でも顕されるということである。私たちは、この世において、神の言葉に立つことができるか。それがキリスト者、教会に問われている。この世の現実とあの世の現実とは、別々の事としない。

最後に《主は羊飼いとて群れを養い、御腕をもって集め／小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる》とあるが、これは羊飼いが羊の群れを導くことが記されている。羊は何でもかんでも羊飼いの言うことを聞く物でもない。特に羊は水が嫌で川を渡ろうとすると嫌がって言うことを聞かないという。そこで、小羊を羊飼いが懐に抱いて先に川を渡るとお母さん羊が子どもを追いかけて川を渡り、それを見たお父さん羊が渡り、そして次々に羊が川を渡って行く。この羊飼いとては神様のことを表している。そして羊は私たちのことをいう。神は、時に私たちを、無理やりにでも渡らせようとする。苦難の川を、苦難な道を歩ませようとする。それは小羊を見る者が後を追う。苦難の川だとわかっている、苦難な道だと知っていても小羊を見る者は歩み出す。

小羊とは何か？小羊とはイエス・キリストのこと。私たちはイエス・キリストをしっかりと見ている者か。私たちはどこに立ち、どこを歩いている者か。アドベントを前に思いを深めて行きたい。（神谷）